

皆様、是非ご予約を!

日中学院・2017年度倉石賞受賞記念および‘わんりい’活動25周年記念
果てしなく広がる黄色い大地・1990年代陝北黄土高原の剪紙展(仮題)

展示会に寄せる思い 田井光枝

開催日：5月14日(月)～18日(金) 会場：東京中国文化センター <https://www.ccctok.com/>

昨年2月、‘わんりい’活動25周年という節目の年明けに、当会が日中友好に貢献とのことで日中学院・倉石賞の対象として表彰頂きました。記念の催しをしようとの話し合いの結果、東京中国文化センターの快諾を頂き、両者主催による表題の剪紙展の開催が予定されました。

この25年間、振り返ってみますと‘わんりい’会員たちの好奇心を原動力に、時には大胆ともいえる活動を重ねてきました。が、東京都心で、しかも中国政府が国外に設立した文化機構である中国文化センターと肩を並べる主催で活動25周年を祝えることは身に余る光栄です。会員各位と常日頃‘わんりい’の活動を応援頂いている皆様のご協力とご声援を心から願っています。

表題の展示会で展示・紹介する作品は、実は、陝西省北部に広がる黄土高原地帯(以下、陝北黄土高原)で生きる人々の‘剪紙’即ち‘切り紙’です。

剪紙といえば、中国に足を踏み入れた方は、「ああ、あれね」と思い浮かべ、同時に「中国の剪紙って結構細かくてきれいなものよね」「でも、どうして活動25周年記念の催しが剪紙展なの? 中国に行けばどこでも売っているし、今さら展示の必要などあるの?」とおっしゃるかもですね。

展示会のタイトルに、わざわざ‘陝北黄土高原の’と断りを入れました。皆さんは「黄土高原」と聞いてどのようなイメージをもたれるでしょうか?

春先の風の強い日、中国大陸から吹き寄せる風で景色が黄色に染まり、路上に駐車した車など細かな黄色いほこりで覆われたりします。洗濯物が埃くさくなり、うっかり外に干したままにしますと洗い直さなければならない事もあります。皆さんがよくご存じの、広大な中国大陸を横断し、日本海を越えて飛



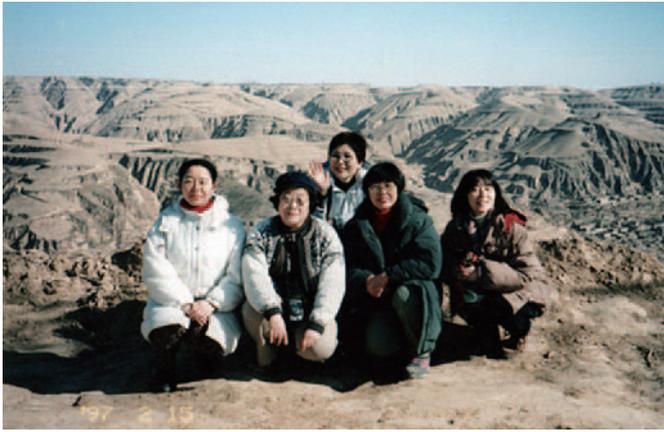
黄土高原

まるで海のように広がる黄土の大地には至る所に深い切れ目が無数にあり「千溝万壑」と表現される。そして溝の淵ギリギリまで耕作される (写真撮影：周路)

来する迷惑な‘黄砂’です。その黄砂のもともとの源はモンゴルから中国北部に広がるゴビの砂漠なのですが、その黄砂が300万年に亘って中国の北西部に吹き溜まり、海拔1000mから2000m前後に堆積した黄色い大地が即ち黄土高原です。かつては緑豊かな時代もあったといわれており、中華民族の祖・黄帝を祭った陝西省の黄帝廟の辺りにわずかに残っている緑の山がその名残でしょうか。

四方八方見渡す限り黄土の大地で覆われています。樹木らしい姿はほとんど目に入らず、地平線の彼方まで続く黄土の大地は至る所地割れしたような深い溝が無数に走っています。生活に必要な水はどこからも湧かず、現在では、国連機関から人が居住する世界最悪の環境といわれているとのことです。

小さな木の1本すらも生えてない丸裸の小高い丘に立っても地平線の彼方まで黄色い大地がうねうねとゆるやかに続き、家らしきものも見えません。しかし、よく見ればその黄色い大地は筋状に綺麗に耕されており明らかに人の手が加わっていま



小高い丘の上で記念撮影 どちらを向いても目に映るのは黄色い大地だ



私たちを見に来た人たちが溢れるヤオトンの入り口

す。訊けば南を向いた崖下にヤオトンと呼ばれる横穴住居があるとのこと。

人の姿が見えない黄土の広がりの中の道を私たちが行くと、いつの間にかどこからともなく子供たちの姿が現れ、大人の姿も現れてきました。そして、さるヤオトンの住居に招かれて入ると窓には子供たちの顔が隙間もない程にべったりと貼り付いています。人生の折り返し点を過ぎて初めての‘見られる’体験でした！

安徽財經大学美術学院教授の職を、定年で一昨年に退職された周路先生との関わり（‘わんりい’ 227号/2017年10月号記載）により、‘わんりい’メンバー有志8名が、外国人訪問が認められるようになって間もないこの地を訪ね、そしてこの地で生活している女性たちの剪紙に出会ったのは1997年のことでした。‘わんりい’誌で昨年より紹介している剪紙作家・高鳳蓮を生み出した陝西省延川県はいわば黄土高原のど真ん中ともいえ

るあたりです。

前置きが長くなりました。展覧会の話に戻りましょう。たしかに中国各地、どこに行っても剪紙があり、繊細で手の込んだ作品に驚きます。今年1月中旬、中国文化センターで展示された、人技とは思われない精密で繊細な剪紙にもびっくりしました。中国の各地各様の、人々の願いを反映する剪紙の図柄はどの地方のものも可愛らしく魅力的です。土産物用に剪られた劇中人物の剪紙なども色あでやかで物語の中に吸い込まれそうです。

けれども陝北黄土高原で剪られていた剪紙はこれまで中国各地で出会った剪紙とはまるで異なるものでした。陝北地方の剪紙に初めて出会った時、‘わんりい’ 227号(2017年10月号) で書いたように、いきなり私の心が驚掴みにされたよう衝撃を受けました。

私と同様深く感銘を受けた同行メンバーの岩田温子さんと話し合い、陝北のこれらの剪紙を「ぜひ日本で展示紹介しよう」と話し合いました。その後、二人は別々ながら二度、三度再び現地を訪れ、周路先生に仲立ちを頂いて更に収集し、翌年1998年の5月、町田国際版画美術館の市民展示室を1週間借り切って、大小の剪紙を組み合わせてレイアウトし、「果てしなく広がる黄土高原の剪紙展」と名付けた展覧会で展示しました。当時はまだ、中国の生の文化が紹介されることが少なかったこともあってか、毎日新聞を初め町田周辺のミニコミ誌が紹介くださり、連日多数の方が来場されて鑑賞者は700名を超える盛会で終わりました。その後、



ヤオトンの窓いっぱい貼り付けられた剪紙を内側で見る

他地区の有志の方々が茅ヶ崎市民館や神奈川県芸術の村などで開催下さったことで更に反響が広がり、剪紙と共に陝北というあまり知られていない地方やそこで生きる人々を微力ながら日本で紹介できた喜びを味わうことができました。

今年5月の剪紙展で展示される剪紙は、それらの展覧会で展示された、主として延安・延川周辺で収集された陝北黄土高原の1990年代ものです。すでに20年が経ち、当地の剪紙はかなり変化しているようです。今回の展示の為にそれら当時の剪紙を日々眺めています。すでに古典的な作品の範疇に入るかと思われそうですが、それでも尚、作者の息遣いまで感じられような迫力があります。

目の前に広げた陝北の剪紙は、実は中国沿岸部で剪られているような精緻なものではありません。中国の剪紙は「^{そうか}窓花」と称され、基本的には魔除けのように窓に貼るまでスタンドグラスのような効果を家の中で楽しみますから、風がきつい陝北の辺りでは線の細い剪紙は風に耐えられません。が、その線の太さによって却って原始的な力強いエネルギーを漲らせているようです。広げる度に思わず「すごい！」と声に出したくなる自分がおり、眺めても眺めても見飽きることがありません。

外国人に閉ざされた地域、自然の美しさにも縁がなさそうな、「人が住む最悪の環境」といわれる土地柄に打ち負かされず、独特の感性で、天が与えた厳しい環境をはね返えさんばかりに剪られた剪紙の力強さと美しさに心が震えます。

当時、時には近隣のものに頼まれたり、年の瀬の市で売ってわずかな金銭に変えることがあっても、一番の目的は金銭でも栄誉ではなく、自分と家族の健康であり、平穏な生活への強い願いです。当時は病気になっても怪我をしても周辺に医者はおらず、十分な薬もない生活環境です。見るからに実り豊かとは言えないところでの耕作はさぞやきつく大変なことだと想像できます。陝北の剪紙は、そのようなところで生きる家族が健康であり、怪我などせず、平穏無事な一年間を過ごせることへの深

い祈りの心を感じます。しかし、陝北地方の剪紙に心打たれるのはその祈りの気持ちの健気さだけのせいでしょうか。

考えてみてください。環境は、およそ四季折々の変化などと無縁の、生きるための過酷な労働によってやっと生きる糧を得られるような丸裸の土地柄です。当時、剪紙の作者たちは無学のまま文字も書けない女性たちが殆どでした。日々の生活への祈りは勿論恵まれた地域に比べれば一層切実なものに違いありません。しかし、だからといってかくも自由に、かくも美しく、かくも力強く表現する原動力の源はどこにあるのでしょうか。

飛躍しすぎかも知ですが、現代の繊細で精密な極みの陶器を見慣れた目が生命のエネルギーの塊のような縄文土器や土偶に出会った感動に近いかもしれませぬ。縄文土器や縄文時代の土偶を精緻な焼き物や七宝の工芸品を並べて比較はできません。価値の基準が違うのです。国や民族を超えた普遍的な人間という存在に根源的に備わる、美しいものを求め、創り出す能力、逆境を逆境のままにせず果敢に乗り越え、更により良いものを目指す能力など、人間である素晴らしさと底力を、当時まだ文明の恩恵を如何ほども受けていなかった陝北の剪紙から感じるのは私だけではないと信じています。

展覧会では、‘わんりい’誌上で紹介されているガオファンリエン高鳳蓮さんや‘これこそ陝北の剪紙’といいたくなるほど迫力の剪紙を剪っていたハンジュウワン韓菊香さんを中心に、大小合わせて500点余りの陝北女性たちの剪紙作品を展示します。是非、陝北剪紙の素晴らしさをご自分の目で確かめて頂くと共にその迫力をご自分で感じて頂き、私の筆力では伝えきれない陝北の剪紙の素晴らしさを知って頂きたいと願っています。

皆様が会期中のどこかで時間を割いて下さって私と共感頂けたらどんなに嬉しいことでしょう。会期中の催しなどの詳細は4月号の‘わんりい’で紹介できると思っております。